

## [寄稿] 復興は常に、子どもらとともにあった

株式会社東海新報社 代表取締役

鈴木 英里



東日本大震災からの復興は、国による「第2期復興・創生期間」が令和3年度からスタートしており、今後は復興まちづくり等、ソフト面の取組みについても、さらに前に進めていく段階にあります。

その一助とすべく、本誌では、震災以降、復興に向けた地域再生や起業・新規事業立ち上げ等に取り組んできた企業やNPO、地域団体等の方々の現在、そして今後の展望等を紹介しております。

2回目の今回は、岩手県気仙地方のこれまでについて、地元紙・東海新報社の鈴木英里さんにご寄稿いただきました。

小社が発行する「東海新報」は、岩手県の気仙地方（大船渡市、陸前高田市、住田町）をエリアとした日刊の地域紙です。

東日本大震災で本県最大の被害を受けた陸前高田、サンマの水揚げで本州1、2位を争う水産のまち・大船渡と、被災した自治体の11年間の歩みをつぶさに追ってきました。

「被災からの復興」というのはもちろん、人々の住まいとなりわいを元通り再生させることを最大の目的として進んでいくわけですが、単にそれらを成し遂げるだけでは、地域の「機能」を取り戻したに過ぎません。

そこに、地域が目指す共通の目標——縦に1本、すっと通った「芯」や「柱」といったようなものがなければ、たとえ見た目上の復興を遂げても、それはとても空虚なものになってしまうといえましょう。

では、被災地において何がその「芯」になった

のかといえば、「将来、子どもたちがここで生きること」に希望を持てる地域にしていこう」ということではなかったかなあと、この11年間の取材活動を通じて思うのです。

ここに2021年3月11日付の小紙があります。発災から丸10年の大特集号です。

小紙は通常8ページだてですが、この日は8×4部、合計32ページの特集を組みました。その第17面、つまり第3特集の表紙を飾ったのは、地域の若者たちの姿でした。

上の写真は現在の彼女たち。下の写真は、震災直後の4月に撮影したもの。撮影場所も同じ、写っているのも全員同じ人物です。

この表紙を見て、「そうだよなあ、丸10年ってこういう歳月なんだよなあ…」と感慨が胸に迫りました。

大人である私たちにとっては、あつというまの日々だったかもしれません。けれど、赤ちゃん

東日本人震災10年

第3特集



# 復興と歩んだ 私たちの10年



東日本大震災発生後の平成23年3月末に撮影された、大船渡市赤崎町の赤崎公園で3人組に遊んでいたおの写真が、同4月1日付の東海新報1面に掲載された。当時、保育園児または小学生だった(写真左から)三浦空葉さん(18)、只野しずくさん(20)、山口聖さん(18)、山口敏大さん(19)、金野聖耶さん(18)の5人は、さまざまな思いを抱えながらこの地で10年間を過ごし、それぞれの道で奮闘する。地域の復興とともに成長してきた5人に、震災後の歩みと思いを描き将来得聞いた。

(24に関連記事)

約10年ぶりに集まった(左から)三浦さん、只野さん、山口聖さん、山口敏大さん、金野さん(令和3年2月21日撮影、大船渡市赤崎町)＝写真上、平成23年4月1日付の東海新報1面に掲載された当時の5人(平成23年3月29日撮影、大船渡市赤崎町)

んだった子は中学生になり、小学生は社会人になり——震災を経験した子どもたちが、それぞれの道を定めて歩き出すほどの年月なんですよ  
ね。

そして、復興を目指して突き進んできたこれまでの日々というのは、「子どもたちが未来に夢を描けるよう、俺たちがこのまちの土台を築いていかねば」と邁進した道程であったと思うのです。

## 大人たちの思い

大津波で何もかもなくした人たちが、それでも立ち上がろうとしたのは、生きていくために生業を再生させねばならなかったことはもちろん、何より、地域の子どもらにへこたれた姿を見せたくないという「意地」が大きな原動力になっていた気がします。

当地でもカキ、ホタテといった養殖漁業が盛んです。そうした地元の産業を学ぶ授業として陸前高田市内の中学校では震災前から、カキ養殖体験授業が行われていました。



震災直後から再開されたカキ養殖体験授業  
(2012年撮影)

その体験授業が再開されたのは、なんと発災からわずか4カ月後の2011年7月でした。

当然、養殖施設は大津波で何もかも破壊され、流失しました。自分たちの生きる糧をすべて

失ったのですから、養殖漁業者には中学生のためにかかわっている余裕など持てるはずがありません。

ですが、彼らは「ただでさえいろんな事を我慢している子どもたちから、当たり前授業を受けられる日常や楽しみまで奪いたくない」「津波に遭ったからといって、あの子たちにここで生まれたことを悔やんでほしくない」「踏ん張っている大人の背中を見せて、地元の海には全国へ誇れる特産品があるんだぞと伝えたいんだ」として、まずは子どもらと一緒に養殖イカダを作るところから始め、翌年からはカキの種付けも再開。「海は時として恐ろしいが、こうして私たちに恵みを与えてくれる」と伝え続けたのです。

「力強く生きる大人の背中」は、地域のおまつりにおいても示されました。

陸前高田市には古くからの伝統として、毎年8月7日に行われる「うごく七夕」(高田町)、そして「けんか七夕」(気仙町)という行事があります。見事に装飾された町内会ごとの山車が練り歩くこれらのおまつりは、もともと盆の精霊供養として始まりました。

壊滅的被害を受け、山車も流失した地区が大半でした。住家がなくなり、町内会自体が解散を余儀なくされたところもあります。それでも住民たちが、震災の起きた年も途絶えさせな



かった。

まちも、大事な人たちも失った中で、生き残った人々にまつりを続けさせた理由の一つは、「子どもらに『小さいころ、おまつりに参加して楽しかった』という思い出をつくってあげたい。『自分たちはこの地区で生まれ育ったんだ』という誇りを持ってほしい」という思いであったのです。

そして、震災直後に七夕を経験した当時の子どもはすでに大きく成長し、今ではまつりを支える側になって地域を盛り上げています。



陸前高田市の「うごく七夕」といった伝統行事は、子どもたちのアイデンティティーをはぐくむのに大きな役割を果たしている

## 思い切り走れるように

皆さんもご承知のとおり、震災直後から学校の校庭には仮設住宅が建設され、校庭を使うことのできない状態が何年にもわたって続きました。公営のグラウンドやフィールドも多くが被災。児童・生徒らは農地などをつぶして整備された小さな仮設グラウンドで、運動をしていたんですね。

でもそれは最低限の運動ができる程度の広さしかありません。野球とサッカーを同時に、なんておおよそ不可能。運動会では、仮設の校庭に描かれたトラックが小さすぎて、高学年の子

ちはコーナーを回りきれず、転倒してしまう…なんてこともありました。



農地をつぶして造られた仮設校庭で運動する子どもたち

すごく衝撃だったことがあります。

当時、小学生の子を持つお母さんが言うんです。「私ね、娘に『お母さん、こうてい、って何?』って聞かれたんですよ…」。

「校庭」という単語が学校生活で出てこない、だから子どもたちが知らない…そんなことってあります? 改めて、私たちはとんでもない「非日常、の中を生きているのだ」と痛感した出来事でした。

さて、サッカーファンの方であればご存じかもしれませんが、岩手出身のアスリートの1人に元・鹿島アントラーズの小笠原満男さんがいます。2018年に引退しましたが、鹿島のキャプテンを長く務め、全日本メンバーにも選出されたことがあるサッカー選手でした。

「小笠原君、…と、図々しくもそう呼ばせてもらいます。それというのも彼は、県立大船渡高校時代の同級生なのです。

小笠原君は内陸部にある県都・盛岡市の生まれですが、高校時代の3年間を過ごした大船渡市と、奥さんの実家がある陸前高田市に対し、震災直後からさまざまな支援をしてくれていました。

そして2011年のある時、サッカー部の同級生たちと一緒に東海新報社を突然訪ねてきたのです。

少し、驚きました。

正直なところ、私と小笠原君は高校時代、特に仲が良かったとは言えません。1年と3年の時には同じクラスでしたが、話した回数を数えられるぐらい。卒業後はまったく交流がありませんでした。

そんな私に「力になってもらえないか」と彼は言ったのです。

小笠原君は自身が復興支援のために開いた小学生向けサッカー教室で、児童らに「ちゃんと練習してうまくなれよ」と言ったところ、「練習する場所がないもん」と答えられて、とてもショックだったとうなだれていました。「そうか、この子らは日ごろ、練習すらままならないほど過酷な環境にいるのだ」——そう気づかされたと言って。



元・プロサッカー選手の小笠原満男さん(写真中央)。復興支援のスポーツ教室などを主催し、被災した子どもたちの運動環境改善に尽力した

それで、「子どもたちのためにグラウンドを造りたいと思っている。でも、一体何から始めたらいいか分からない。用地提供など、地元の人に呼びかけてもらうことはできないか」と。わらにもすすがる思いだったのでしょね。

もちろん、すぐに紙面でその思いを紹介しました。小笠原君と大船渡高校の同級生たちが中心となって賛同者を得るために奔走し、Jリーガーたちの協力も受けて、大船渡市にグラウンドを造ろうというプロジェクトが始動しました。

プロ選手らによるチャリティーイベントの開催や、スポンサー集めなど、小笠原君は高校時代の寡黙さからは想像もつかないほど積極的に動いてくれました。

「子どもにとっての3年、4年って、大人とは比べものにならないぐらい大事な時期。その成長期にのびのび運動できないなんて、そんな不利益を子どもたちが被らないよう、地元の大人として責任を果たさなきゃだめなんだ」。そう言って、2020年に完成したのが、大船渡市にある赤崎グラウンドです。



大船渡市に開設された「赤崎グラウンド」

小笠原君は、グラウンド整備だけではよしとせず、そこから先のことまで見据えていました。

「気仙地方は雪が少ないから、ここに冬の間、いろんなチームを集められる。人が集まるようになれば地域にお金を落としてくれるし、外から強いチームがくれば、地元の子たちの実力も鍛えられる。外から人が来る仕組みをつくってあげたい」と。

さらに、県外の子どもたちにも震災のことを伝えたいとって、毎年のように茨城県の中高生らを連れて来て来てくれました。

子どもの未来についてここまで考えてくれるアスリートが岩手から輩出されたことを誇りに思います。また、彼のような選手がこの赤崎グラウンドから巣立って行ってほしいと願うところ です。

## 互いの背中に励まされ

「たくましく生きる背中を見せたい」「故郷のために今こそ力を尽くさねば」

そんな大人たちの姿に呼応するかのよう に、子どもたちもまた、「地域のため、自分にできることは何か。どうすれば恩返しになるのか」と考え、行動に移してきました。

そしてそれを見た大人が「あの子たちには負 けられない」と鼓舞され、さらに前へと歩みを 進める――。

そういう「好循環」をずっと目の当たりにし てきたこの11年間でした。

気仙地区にある小中学校の校長先生方が、異 口同音に語ることがあります。

「気仙ではまだ、地域の大人がみんなで子ど もたちを育てていくという意識が強く残ってい る。そのため、子どもたちも『自分たちはこの 地域の一員である』という思いが強い」と。

その言葉に思わず、「ほんとにそう」と深く頷 いてしまいます。

小学校、中学校、高校問わず、児童・生徒を取 材させてもらっているとき、「地元の役に立ち たい」「ほかの人を助けられる人間になりたい」 という言葉を何度聞いたかしれません。

避難所で、被災した高齢者の肩もみをしてあ げる子。仮設住宅に閉じこもってしまう人がい



子どもたちの発案による肩もみボランティア



震災当時、まだ小中学生だった子たちが成長した姿を 紹介した東海新報の紙面。中央に写っている自転車の 生徒たちは、発災直後に再開された「カキ養殖体験授 業」を経験した世代 (『東海新報』2019年3月11日号第9面)

ないよう、毎朝のラジオ体操を提案した小学生。 まちづくりのアイデアを市長に提案する中学 生。自分も家を流されながら、得意の日本舞 踊を避難所で舞って「皆さんに明日はきっと晴 れます」と励ました男の子。物資の仕分けが大 変と聞いて、毎日避難所に通ってお手伝いしてい

た中学生…。

「自分はこの地域の一員なんだ」という思いが根底にある彼らは、小学生なら小学生なりに、中学生なら中学生なりに、「今の自分にできること」でふるさとを支えてくれました。

そして、成長に応じ、彼らにできることはどんどん増えていく。

私たちも、そういう若者たちの成長を追いかけられるような記事を、折に触れて特集してきました。

若い人たちの活動や思いを読者に知らせることは、また気仙の大人たちを励まし、生きる原動力になる。「ここをもっとよくしていきたい」という思いを強くし、たくましい姿を子どもたちに見せてくれる。そういう好循環こそが、新たなまちづくりをしっかりと支えているのだと思います。

## 次世代に教訓をつなぐ

陸前高田市の中心市街地には、「米沢商会」という民間唯一の震災遺構があります。

これは、米沢祐一さんという持ち主の方が、震災の年に生まれた娘さんをはじめ多くの人に「大津波の教訓を伝えたい」と、ご自身の持ち出しで残されたものです。市外から大勢の方が見学に訪れる場所になっています。



震災遺構「米沢商会」ビル

米沢さんは毎年、長女の多恵ちゃんを連れて3月11日にはこのビルに上がり、彼女が幼いころから災害から命を守る行動について繰り返し話してきたそうです。

その教えが、多恵ちゃんの中にしっかり根ざっていたのでしょう。彼女は2018年度、陸前高田市版防災士である「防災マイスター」に、小学生として唯一認定されました。気象をはじめとする専門的知識、避難所運営のあり方などに関するハイレベルな講座を毎月受講し、最終テストを突破しなければ防災マイスターにはなれません。

大人でも難しい認定試験に見事合格した多恵ちゃんですが、彼女自身に震災の記憶はまったくないわけです。それでも、「次は自分がみんなの命を守る番だ」という使命感を強く持つ彼女のような若い世代の存在は、これからますます大きく、重要になっていくことでしょう。

さて、県内最大の被害があった陸前高田でも、公園や子育て支援施設などが復旧し、野球場やサッカー場などからなる「高田松原運動公園」もオープンし、子どもたちをはぐくむ環境が整ってきました。

中でも大きいのは、高田松原の復旧です。

国の名勝であった高田松原。白砂青松の美しいビーチで、最盛期には一夏で数十万人の海水浴客が訪れる一大観光地でした。

しかし、大津波により、7万本あったとされる松林が流失。砂浜も地盤沈下によってほとんど失われました。唯一残ったのが「奇跡の一本松」であったことはもはや説明不要かもしれません。

見る影を失ってしまった後も、高田松原はずっと市民の誇りであり続けました。そして、その松原を再生させるために力を尽くし続けた



大震災直後の高田松原。根元から折れた松が無残に広がっていた

のが、「NPO 法人高田松原を守る会」です。

松苗の育成、植樹、苗を強風から守るための竹箒づくり…長い時間と、たくさんの労力と、数え切れないほどの支援の手によって、一つ一つ取り戻してきた団体です。

2017年に再生植樹会が始まり、コロナ禍による停滞もありましたが、昨年までに計画されていた4万本の植樹が完了しています。

そして昨年4月。とうとう！高田松原に誰でも足を踏み入れられるようになったのです。7月には11年ぶりの海開きも開かれました。



2021年に高田松原海水浴場が復旧

家族連れや、カップル、友人同士で遊ぶ姿——。かつては当たり前だった光景が再び見られるようになった時、私は涙を禁じ得ませんでした。

明らかに震災後に生まれた子ら…かつての松原を知らない子らであるにもかかわらず、そこで遊ぶ子どもの表情は、いつの時代も変わらないのだなあと、こみ上げてくるものがありました。

国の名勝であったかつての面影を思い出させるにはまだ、松原の苗木たちはあまりにも小さいです。けれど、泳ぎに来た子らがいつか、「あの時は僕の背よりも低かったのに」と驚いて松林を見上げる日が、きつとくる。

そのあすへの確かなひと足ずつをつぶさに見つめ、そこに携わってきた方々の思いを、次世代に伝えていきたいと思います。



高田松原に植樹された松苗 (2017年撮影)

#### 略歴

鈴木 英里(すずき えり)氏

1979年、岩手県大船渡市生まれ。立教大学卒。

東京の出版社勤務ののち、2007年、大船渡市・陸前高田市・住田町を販売エリアとする地域紙「東海新報」社に入社。

震災時から2020年まで記者として、被害の甚大だった陸前高田市を担当。

現在は同社代表取締役。